

# 共感覚（シナスタジア）

色字共感覚によって地精人を精製し「妖精の世界」にふれる

令和4年度

東京藝術大学大学院美術研究科

博士後期課程美術専攻油画研究領域（油画）

1319905 春田紗良

（論文内容の要旨）

本論は、筆者の画因である「妖精の世界」について、「共感覚」を糸口を探ろうとする制作論である。「妖精の世界」とは筆者が空想する異界であるが、同時に人類の空想する異界でもある。さらに、それらを遡ると人類の最も根源的な知覚領域に到達するのではないかと筆者は考えており、この仮説を検証するため「共感覚」という知覚現象に着目する。

「共感覚」とは、例えば音を聴いたときに色が見える「色聴」などの異種感覚を自動的かつ不随意に知覚する能力のことである<sup>1</sup>。筆者の「共感覚」は「色字共感覚」であり、いわゆる文字に色が見えるタイプの能力である<sup>2</sup>。「自動的かつ不随意に知覚する」とされているのは、単に連想による想起を指すのではなく、例えば「花」という文字を見ると薄紅色が実際に視えている状態を正確に意味するためである。

筆者が文字に視る不可思議な色彩や人の姿は、まるで太古の昔から自然界に存在していたかのように感じられる。筆者が本論で「妖精の世界」と名付けた未知の領域も、おそらく人類史のはじまるもっと以前から既にあったのではないか。「妖精の世界」は筆者にとっての画因であり今世の内に究明しなければならない命題であるが、筆者の与り知らぬ力によ

---

<sup>1</sup> リチャード・E・サイトウィック、デイヴィッド・M・イーグルマン『脳のなかの万華鏡—「共感覚」のめくるめく世界』山下篤子訳、河出書房新社、2010年、頁68、共通する診断的特徴「自動的かつ不随意的」より

<sup>2</sup> 正確には文字を見たときのほか、音で文字を認識したときにも色を知覚する。また、これは筆者の場合であって同じ色字共感覚者であっても音からは知覚しないタイプなど様々なバリエーションがある。

って日々変容していく。筆者の関与があってはじめて彼らが精製されるにも関わらず、筆者は彼らの棲む場所をコントロールすることはできない。本論では、この「妖精の世界」の実態を垣間見るため、「共感覚」という知覚現象を糸口とする。

さて、本論は三章から構成される。まず序論で、「妖精の世界」を知るためには「共感覚」が不可欠になることを踏まえた上で、第一章で「共感覚」及び「色字共感覚」の概観について詳述する。海外（主にアメリカの神経内科医リチャード・E・サイトウィックと神経科学者デイヴィッド・M・イーグルマン）と日本（浅野倫子、横澤一彦）の先行研究について触れながら、筆者自身の「共感覚」の内観についても紹介する。また、色字共感覚者だったブルーストの「妖精の世界」を参照しながら「色字共感覚」を三つに分類することで、第三章で述べる「制作過程における『共感覚』の関与」を考察するための前提条件を整えたい。

第二章では、第一章の末尾で色字共感覚者であるブルーストの「妖精の世界」について述べたことを承けて、筆者にとっての「妖精の世界」について実体験を踏まえながら詳述していく。筆者が「妖精の世界」にはじめてふれた幼少期の記憶と「鳳来」にまつわる自然観から、「精霊」の知覚や祖霊の実感について柳田国男を参照しながら考察する。また、「妖精」の魂の観点からユングを引用し、徐々に筆者が制作でどのように「妖精」と関わってきたのかを明らかにする。

第三章では第一章、第二章の内容をふまえて「妖精の世界」を絵画として象<sup>かたど</sup>った際の領域「画<sup>がちゅうかい</sup>中界」について述べる。第二章に引き続き「妖精」の魂に関わる制作のプロセスについて述べ、「共感覚」が関与する「地精人」の精製過程について述べる。その後、「妖精の世界」を象<sup>かたど</sup>り結実させた「画<sup>がちゅうかい</sup>中界」について、筆者の過去作品を例にあげながら、同じ共感覚者であるカンディンスキーの世界とユングの絵画論を参照し比較検討していく。また、過去作品のひとつ《フルリとバレス》については、「地精人」の精製過程と「画<sup>がちゅうかい</sup>中界」の観点から詳述する。さらに、これまでの章をふまえて制作された博士審査展提出作品《<sup>はは</sup>妖<sup>ま</sup>精<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>くに》について述べ、それぞれの作品（《花のくに》《あめのわたつみ》他）とその制作過程を振り返り、結論へと至る。

以上が本論の内容とその章立てである。